

科目名	多文化共生教育特論	担当教員	坪内俊憲
科目属性	専門科目B	単位数	2単位(面接0.5単位)
<p>【授業の目的・ねらい】</p> <p>国際化の急速な進展により、異なる国家や地域、民族、環境のもとに生活している人々が相互に交流・交錯し、良好な関係を保ちつつ、それぞれの文化や歴史の個性を認め、異質性を尊重し、「共生」することが 21 世紀の基本的課題となっており、この意味で「多文化共生教育」の意義は高まっている。多文化共生社会の目標とも言える「地球上の誰一人として取り残さない」という誓いのもと、2015 年 9 月、国連サミットにおいて 17 の目的と 169 の目標を設定した「2030 年までの持続可能な開発目標 (SDGs)」が採択された。しかし、経済の急速な国際化の歪みから、2016 年、アメリカファーストを掲げるトランプ大統領が誕生し、イギリスの EU 離脱決議、イタリアの反 EU 政権の誕生など、反グローバリズムが世界に広がってきている。人口減少を危惧する日本政府は、2018 年、海外から多数の技能実習生導入を可能にする法案が可決され、途上国から低賃金労働者を受け入れて経済成長の目指すこととした。このように多文化共生とは逆の方向の社会が振れるなか、本科目では、国際機関の宣言や計画、持続可能な開発目標、教育目標などを確認する。この国際的な背景理解の下、実質的に世界第 4 位の移民大国となった日本における教育について、政策面、実践面の課題／問題を学習する。このように矛盾する日本社会において、多文化共生教育の実践例を学び、多様な文化が尊重された平和な未来を築くため、わが国におけるこれからの多文化共生教育のあり方について考察する。</p> <p>この授業の具体的な到達目標は、以下の3つである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 教育に関わる国連の歴史、および、2030 年までの持続可能な開発目標 (SDGs) の理念、目標、ターゲットについて、多文化共生教育の視点から検証し、教育における取り組みを学ぶ。 2. 世界各国が今日抱えている諸課題やわが国における外国にかかわる子どもの教育について全般的に知り、その解決方を理解する。 3. 教育にかかわる世界の人びとの思いや願い、知恵などについて学習し、21 世紀に求められる教育をどのように実践していくか考察する。 			
<p>【授業計画】</p> <p>全15回の授業計画は以下のとおりである。</p> <p>第1回 ユネスコ憲章(1945)を学習する。</p> <p>第2回 世界人権宣言(1948)を学習する。</p> <p>第3回 児童権利宣言(1959)を学習する。</p> <p>第4回 人間環境宣言(1972)を学習する。</p> <p>第5回 国際理解・国際協力及び国際平和のための教育ならびに人権及び基本的自由についての教育に関する勧告(1974)を学習する。</p> <p>第6回 中央教育審議会審答申「教育・学術・文化における国際交流について」(1974)を検討する。</p> <p>第7回 日本ユネスコ国内委員会「国際理解教育の手引き」(1982)を学習する。</p> <p>第8回 学習指導要領の変遷から、多文化共生教育とのかかわりを検討する。</p> <p>第9回 2030 年までの持続可能な開発目標 (SDGs) で定められた 17 の目標と 169 のターゲットについて、多文化共生教育の視点から学ぶ。</p>			

- 第10回 多言語化・多文化化が進む大学における取り組み例を学ぶ
- 第11回 多言語化・多文化化が進む大学における当事者による報告を学ぶ。
- 第12回 多言語化・多文化化が進む大学における学生たちの学びの実践を知る。
- 第13回 多民族国家の学校教育における取り組みを学ぶ。
- 第14回 多文化共生教育の実践プログラム、NGO 活動を考察する。
- 第15回 まとめ

試験

多文化共生教育の原点となる国連・ユネスコ関係資料などについて、当該機関が公開している情報、および書籍から学習する。わが国の多文化共生教育関係資料から、多文化共生教育とのかかわりを検討する。前述の理解を踏まえて、SDGs における多文化共生教育の果たす役割、目標を理解する。

次に、日本の大学における多文化共生教育実践事例を学び、多言語化・多文化化が進む学校教育、外国にかかわる子どもの教育課題、多文化共生の学校づくり等について学習する。教科書のみならず、公的資料や各都道府県・市町村の教育研究・研修センター研究資料、各学校の実践報告書等を幅広く収集・整理し、取り組みの実態を把握し、それぞれの課題を理解するとともに多文化共生教育を考え、実践方法を構築する。

教科書だけでは対応できないので、国連機関やわが国の教育に関わる情報は、受講者各自が、図書館、インターネットなどで資料を学習して基本的な事象について把握することを期待する。

【評価方法】

スクーリング 0.5 単位、レポート 1.5 単位である。評価は「レポート評価」(30%)、「スクーリング評価」(30%)、「科目修得試験」(40%)の割合で総合して評価する。

【教科書】

①明治学院大学教養教育センター・社会学部 編 (著)、多文化共生を学び合う一配慮と偏見のはざままで、2018年、かんよう出版 ISBN-10: 4906902944、ISBN-13: 978-4906902941

②一般社団法人 Think the Earth 編著、蟹江憲史監修未来を変える目標-SDGs アイデアブック、2018年、紀伊国屋書店、ISBN:978-4-87738-513-2

【参考図書】

- 明治学院大学教養教育センター・社会学部 編 (著) (2016)、もうひとつのグローバルゼーションー「内なる国際化」に対応した人材の育成ー、かんよう出版。
- 明治学院大学教養教育センター・社会学部 編 (著) (2017)、外国につながる子どもたちと教育ー「内なる国際化」に対応した人材の育成ー、かんよう出版。
- 池間哲郎著 (2015)、世界にもし日本がなかったら、育鵬社。
- 池間哲郎著 (2015)、日本はなぜアジアの国々から愛されるのか、扶桑社文庫。
- アーネ・リンドクウィスト著、川上邦夫訳 (2005)、あなた自身の

社会－スウェーデンの中学教科書、新評論、ISBN4-7948-0291-9

- 天野正治・村田翼夫編(2001). 多文化共生社会の教育、玉川大学出版部.
ISBN:978-4472402609
- 植田晃次・山下仁編.(2011). 新装版「共生」の内実－批判的社会言語学からの問いかけ、三元社. ISBN:978-4883032884
- 日本国際理解教育学会編.(2010). グローバル時代の国際理解教育、明石書店. ISBN:978-4750332277